婦人と子と

第四巻
第六號
本誌は、婦人教育及び家庭教育、その他緊要なる各種の問題に関し、読者相互の質疑答弁に掲載するものとします。本誌は一般読者の寄稿を歓迎し、特に家庭観念維持、婦人教育、教育方法、子育てなどの家庭の問題に於ける婦人教育研究の状態を、各地に於ける婦人教育幼児保育の実態、各種学校附属幼稚園内のフレービル会へ向け何ケ月分か織っての納めの上、申込されると、雑誌は常会から無代價で御送附致します。加入者にない方、日本橋区本町三ノ十一号三寸堂堂へ御注文下さい。

一冊拾銭六角前五拾七銭十二角前金一円拾銭他に郵税が一冊一銭づくの割合です。
会　告

拜啓来六月十一日第二土曜日午後一时三十分女子高
等師範学校附属幼稚園に於て第三十四回常会相開き
候間萬障御縁合せ御知友御同伴御出席被下度此段御
通知申上候也

追つて當日は會員野口幽音子田中文子の講話可有

之候

六月五日

フレーバル会

員御中
法律上の婦女

全一冊

定価 金五拾錢

郵税 不要
<table>
<thead>
<tr>
<th>妊人と子ども</th>
<th>第四巻</th>
<th>第六号</th>
<th>目次</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>子ども</td>
<td>金州丸</td>
<td>いそもぶ話</td>
<td>戦争の物語</td>
</tr>
<tr>
<td>英国倫敦のフレームラ会</td>
<td>和歌六首</td>
<td>面白い問答</td>
<td>類例通</td>
</tr>
<tr>
<td>女人と子ども</td>
<td>黒田定治</td>
<td>阪本安次郎</td>
<td>河野清子の肖像</td>
</tr>
<tr>
<td>割烹十二ヶ月</td>
<td>平野後子</td>
<td>陣中佳話</td>
<td>飯塚忠次郎</td>
</tr>
<tr>
<td>進樹の蔭に求め</td>
<td>人言</td>
<td>小児に関する取調</td>
<td>水戸</td>
</tr>
<tr>
<td>友に答へ</td>
<td>全</td>
<td>唱歌と動作</td>
<td>王楽</td>
</tr>
<tr>
<td>松本安次郎</td>
<td>東</td>
<td>小学の学校時代</td>
<td>郵便</td>
</tr>
<tr>
<td>女子高等師範学校</td>
<td>奏章</td>
<td>北里</td>
<td>北里</td>
</tr>
<tr>
<td>奏会 ○ 会報</td>
<td>木</td>
<td>びらはとらしい</td>
<td>木</td>
</tr>
<tr>
<td>奏会 ○ 会報</td>
<td>木</td>
<td>びらはとらしい</td>
<td>木</td>
</tr>
</tbody>
</table>

幼稚園保育法を読むま | 市川源三郎 |
もど子と人婦

号六 第四巻 第四

小石川の金華高等小学校では、毎週の金曜日の午後に、校長さんの講堂修身のお話があること

今日は、五月の始めの金曜日。
今しも、午後一時の鐘がなりましたので、高等科の生徒は、皆

一齊に整列して、夫れく受け持ちの先生方の號令に従って、

規律正し順次に講堂に入り

講堂の正

面には、

此程名譽
図が掛かって居り

口調で、次の様に話しました。

校長は極めて沈着していた。

重々しい、

併々明瞭した

丁寧に敬立して、

一齐に起り上りまして、

教壇を入れて來ました。
十三嶽の長さが三百六十呎からありまして、去る明治二十三年十二月英軍で出来上がった船でございます。郵船協会の船の中でも一番速力の速い船であります。真先に駆けけて海軍御用船の任務に当ったのは先月の二十五日、韓国元山江守備の陸軍某部隊に於きました。陸兵を搭載し、水雷艇隊に護送されて、敵の状況を視察の為、一中隊を此方面に派遣する事になりました。そこで、私が金州丸はこの上陸を担当し午後二時には元山を抜鍋し午後三時には早くも目的地に着きましたから、陸兵はやがてこに上陸し、各方面に分れてふに勇ましく元山を抜鍋し午後二時には、早くも目的地に着きました。
慎重をなし、有力なる任務を全うして、皆無事に帰船しました。

午後六時、やがて、其盧を挙荷して帰航の途につきま

然るに船の進航するに従ひて、天候漸く險悪となり、墨を流せ

如き密雲は低くして走る事頃の急に、船を洗ふ波さへ俄に轟

くとししてすさましく荒ぶるといふ風で何さまで顫る不積の状

況となりましたから、是非なく、掩護の任に當って居った水雷

艇隊は、遠湖島といふ島に風波を避けて、ここに一夜を過ごすこ

時に既に其日の十二時頃、際涯もなく日本海の真中に、

風波
を蹴って進航し来った。私が金州丸は、丁度、新埔の沖合凡そ二
十浬の近辺に居って、遙に数點の烽火を見ました。それが、
我が艦隊が、二十三日からかけて、浦鹽方面に向った留守中、
元山津に入り来り、そこで碇泊して居った。我が商船五洋丸を
撃沈して去った所の有力なる敵の浦鹽艦隊ならばんとは、遙の
方、併も夜中の事とて、さすがの金州丸でも、とても見分けが付
かなかったでしよう。敷

陸、彼は有力なる三隻の戦艦に二隻の水雷艇
あり一発の空砲を発し、ついて到より止れの砲を発しました。何

否
一の商船で、とても敵する事は出来ないのであるから、船長八木君と政吉氏は、言ふがやくに船の進行を停止しました。かくと見て敵艦ロシア号からは、数人の士官一隻の短艇に乘って金州丸に乗り付けまして八木船長と何事か問答の末、船長と他に監督将校溝口海軍少佐及び飯田大主計の三人は若干の水兵ともに我短艇に乗って敵艦ロシア号に乗移って仕舞ったが、どうしたのか、夫々ときり何の音信も来らない。此時まででも、私が勇敢なる陸兵一隊は、上官の命令に因って慌て騒騒かず粛然として静まり返って、船内に潛んで居りましたため、監督将校が、敵艦に乗り移って仕舞った切り、帰船しないとならば、如何に決死の覚悟が、仕舞った切り、帰船しないとならば、如何に決死の覚悟。
陸軍の身の計らずも、渺茫たる海上の真中に、敢々水屑を落ちるかと考えば、當時此勇士の面々の胸中は、悲痛慟慟の極も申しましょうと、ロシア戦闘艦からは、又々一名の士官と二名の水兵を始めて船内一々子細に點検しました末、遂に我が本艦へ引き返しました。
ですが、
それから、
各何者と
の間に
船員は、
各自短艇
に乗って
ロシア
号を見て
かけ

何たる勇ましい言葉でしょう、
椎名中隊長を始め、
稽古大尉、
寺田中尉、
横田中尉、
樫原少尉、
駿曹長、
岡野曹長等の人々は決
然として、
最後の手段を講じました。
中隊長は慨然として一同
に向け

诸君！金州丸が最期の時期に迫ったと同時に
身は陸軍の軍職を奉じ、敵の馬前に死す
後の間も迫りました。
身は陸軍の軍職を奉じ敵の馬前に死す
甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗

甲板を洗
甲板を洗
しかも水

は次第々

に篙を

増しては

や一隊

の膝を没

するまで

なり

敵艦から

ひながら一、二、三の、

掛声で、

ズドンと一發、

潮風に高く
響かせると同時に、枕を弁へ打ち砕けた。
残る面々は

に、生命の限り、限り、一発でも敵にくくれてからいれば
というので、潮水の肩を浸すまで、両手を高く上げて打って
居ましたのが、間もなく敵から発した水雷一発、ズドーンと響く
や、船も人も大空遥に吹き上げられたが、大日本帝国万歳の
声は、空中遥かに響き渡った。

姿を海中に没し去りました。夫と同時に、我が金州丸は、全

時近くでありました。

時近くでありました。此騒ぎの最初に於きまして、乗り込ん
で乗り込みの人夫や商人と夫

見付からない様にして、沖に濁ぎ出しましたが、非常な困苦を
冒した末、遂に馬飼島に漂着して、そこから、無事新埔へ帰着したので、夫からして詳しい金州丸の事情が判然事になったのであります。さって、一方に於ては、彼の金州丸掩護の任務に當った水雷艇隊は、天候陰悪のため、金州丸を分れて、一晩を遠湖島に明し、翌廿六日に至って、そこを抜回して元山津に引き返して来て所見ののみならず、因地に於て敵艦のために撃沈せられても居ると、金州丸は無残に、港内に於て敵艦のために撃沈せられても居るといふ有様指を屈し、見ると、金州丸は歸航の途中、正しくこの敵艦に出遭って居るのれらばならぬ。さては、不運にも五洋丸と同じ運命に遭ったの
ではあるまいか、もしそうすれば、今に乘って居た、陸兵の一隊は、あれば、船と共に沈んだか、夫とい、まぐく捕虜と
なったかに違いない。
夫とも、甘く切り拔けて、陸地近くに乗り上げて、人だけは助かったであろうか、何しろ、たと事ではな
いといふ所から、上村〇〇艦隊司令長官は、直ちに、金州丸捜
索の任務を以て〇隻の軍艦を派遣し、元山から浦鰲に至る沿岸
一帯の海上を残る隈なく捜索させましたのが、其中の一艦か、金
州丸乗込員の遺物とも見られる品の道入って居る主なき一隻の
伝馬船の波のまにく漂流して居たのを發見した切里、遂に我
が金州丸の消息は、沓として知れなかったといふ事です。
いそっぷ物語

五十九 親子の蟹

或時、蟹のつぶ母さん、子蟹に申しました。
「か前なぜ、そんなに、横に歩きなの？」
直に歩く方は、どれ程体裁がよいかも知れない
よ子蟹は答えますに
「ちっ母さん、そうがうよう、だから、ちっ母さんが
真直な道を教えてくれたものでしょう、私だって、
ちゃんとの方で歩きますね。

二十一 鼴と蛙と麗

かか母さんは、これで全く開口して仕舞ひました。
いつも、地面の上で許り住んで居る蛙、ひうとし
た事から、大抵は水の中で居る蛙とよ仲よしにな

所まで来た時、鼠をつれたなり、いきなり、ビヨ
陸と水の中へとびこみました。そして、蛙は
分の住んで居る水の方へ連れて行つて、其岸

遊を回ったりして居ますと、可憐相に、鼠は、游
中をくいたり、クリクリくくと鳴いては
て仕舞つて、其死骸が水の上に浮き上って居ります。
吉富少尉といつた方は、朝早くから、戦場となっ
て、敵を偵察し、やがて、本隊に帰ろうとしま
した所で、敵は向う岸から之を見附けて、雨霰の
ビュッと風を切って飛んで来て、少尉の腹の真
中に当ろうとしたが、此時、少尉は、呼子の笛を
胸に下げて居たので、丸は、其呼子に當った為め
深く腹を打つ事のなかったので、僅に傷で済んだとい
う事です。

又、某師団の一兵が、合戦の最中、頭を下げ
て、其首を貫かれたが、合戦の最中、頭を下げ
て、其首を貫かれたが、一兵が戦争中、敵の丸を
受けたが、其丸は左の手と胸との間を通って、背
囊の片端をうちなき、其中に入れられて有った
知差し
を打ち破ったけれども、背囊は少しも傷がつかなかった

面白く聞答

ある處で、商賣人を、船頭とか出邉って、いろく
知識を出して居らしめた中には、次のような問答が始
まりました。

商人時に、か前さんのか父さんは、どこでか失

わかりました。
船で necessário に 海にかけて 漏れ死にましたよ

商人知 部分さん は どこで

商人ち と 部分さんも 其の

商人ち と 部分さんも みん

海で死にました

商人ち

そんなに皆さんが 海で死んだ

のに ふ前さんはよ 平気で海に出られますね

船で 死にました

商人ち

あなた の お前さん は どこで死にましたよ

亡くなられたのですか

商人ち と 部分さん

そのような 皆さんが 握り握って

皆さん と 部分さん は

床の上で死にましたよ

平気で毎晩 疲命に 寝て居られました

二丁の鍵

一日の 農夫 が、鍛冶屋で 鍵を二丁買ったき

ました。そして 二丁は、毎日田や 火を は

壁にかけて 置きました。其から 八九個月して此の

二丁の鍵を 載て見ました、始終使って居る方

は、邪々 光って 絢麗でした が、使はずに 壁に

かけて置いた方は、鍵だらけで 洗わなくなつて居す

法螺國通信

ぶくべこまを

常国に登り候ば、まことに珍らしき事ばからに

船で 常国に
考へ物

盲人にでも見えるものは何か？

自分に取られるものは何か？

鳥が十羽目を止めて居たら、それを砲弾で三羽射落したたら、後に三羽残ったという話は？
二十四

マーレンホルツ男爵夫人が英国に住んで、ハングラストと雲で、第一の幼稚園を起し、それから夫
子どもと人家

ミス・ヒーローウルフと云ふ人々とマダム・ボルチガールと云ふ二人が英国に来られて、マンチェスターで幾つかの幼稚園を開いて居た。其の後ヒーローウルフはダブリンを行って幼稚園を行って居た。又雲フルフと云ふ人々に従事して居る。クラシメと云ふ人々は其の事でホッケル、ソヴァイヤーの第一の會長であった。尤も此際はミス・ドレックが英国に来らる。前に出来て居たもので、千八百七十二年にデュマン・ボルチガールが試験を行ふ。その時から此会が成立した。子供の事を考える者は、これを行う事を望む。
して居る幼稚園に関する会を結びして联合試験団体の組織を企てた、今更耳にペットフォルドにある
団体が之に加入したのみであります。シェルの企てた通りに連合団体が出来れば英国の保育事業の上
一層の効果を奏することといふと思はる、今日でもフレーベル論理サイタイではどうか聴合しやうと命じて居
る。
此フレーベル論理サイタイと並び称せられて居るもののが他にモーソ、マンチャスターにありります。それ
はキッデルガルテンアッソシエーションと云って幼稚園会と云ふ、共に英国にあって保育事業には大功
成に従事して居る、マンチャスターの此会はフレーベル論理サイタイと為って京阪地方にある会はマンチャ
スターにあるものと京阪にあるものと比較するために及ばぬが倫敦にあるフレーベル論理サイタイに似て居る、そ
れから倫敦地方にある会はフレーベル論理サイタイの共に英国にあって保育事業には大功
成に従事して居る、マンチャスターにあります。それぞれに於ては倫敦に於けるフレーベル論理サイタイが如何
に位差があるかは私が申さぬで判らんと思う、本會で行って居るか我輩不幸にして之を知らぬ、即ち倫敦にあ
るフレーベル論理サイタイの如く雑誌に有益な幼稚園に関する書物を出版した事は聞かぬ。又一般
の為に講習会を開いたと云ふことも聞かぬ、又本會に於て他の幼稚園の視察をするとか監督するとか
云ふ高い地位を保つて居ることも見受けない員員のみの集会以外に講義なり演説なりを開いて一般人に
子どもの教化のため、学校の教育を重視し、保育を含めることが重要です。学校の教育方は、子供たちが自由に学べる環境を提供し、その中で自己の能力を発揮する機会を提供することが望ましい。さらに、各家庭において、子供たちの教育が円滑に行えるよう、親と学校の連携が不可欠です。
第 三 章  国 家 与 国 家 间 的 经 济 合 作

3.1  国 家 间 经 济 合 作 的 类 型

3.1.1  互 利 合 作

3.1.2  互 助 合 作

3.2  国 家 间 经 济 合 作 的 形 式

3.2.1  来 件 加 工

3.2.2  合 作 生 产

3.3  国 家 间 经 济 合 作 的 重 要 性

3.3.1  促 进 经 济 发 展

3.3.2  保 障 国 家 安 全

第 四 章  国 家 与 国 家 间 的 政 治 合 作

4.1  国 家 间 政 治 合 作 的 类 型

4.1.1  和 平 合 作

4.1.2  安 全 合 作

4.2  国 家 间 政 治 合 作 的 形 式

4.2.1  政 治 互 助

4.2.2  政 治 互 助

第 五 章  国 家 与 国 家 间 的 文 化 合 作

5.1  国 家 间 文 化 合 作 的 类 型

5.1.1  交 流 合 作

5.1.2  合 作 创 作

5.2  国 家 间 文 化 合 作 的 形 式

5.2.1  文 化 互 助

5.2.2  文 化 互 助

结 语
する知識を興へ且つ他の教育者との聴合を進めて教育の統一を謀ることも当人を道に於て英議のフレーベルホームサイターの事業を思い出し本会に私の望む居ることを申し上げましたのであります。

あい数師、いかばかり其心ざまはけ高かかるべき者ぞ、

げに人を教えるするには、其人先つ父たちざるべからず、唯人たるのみにては足らずなり。さるにてても、此業を傭人風情の者に打ち任せて願ざることの悲し

さかな

（ラッソ）
若葉も、やさしい月の影をかしきに
きいて見よ、人々のうながし、け
ば行きつしけば語りけるを
いっしょに青葉しきて月の
ひまする影も夏かにけり
若葉をてらす月のすしさ

平野後子

首夏山
佐保山も龍田のやつまり夏くる
ひとつ緑のいよいにいつつ
山家水
などか世に急さいつらん隠れす

星うつり物とそこはれますかいか
鏡

【三十三】

いくさ人渉路にかに仰くるら
利鎬に似たるゆう月のかけ

清ら心はくかる世からぬや
情をこめて茂るかや
石文汝とえねかほくは
雨風ふきて幾とせを
ねむりて狭く暮すとも
銀杏のふかき情には

千代萬世も変らなく
やすく此の世を送れがし
朽ちて竈の灰となり
煙りと消える其巡に

女に答えて

君かつれなきこととの葉を
さくたび毎に言葉なし

それは何故と云ひかず
狭き胸をはむるつ
例へばさき皮はきて
造り立てたる破かな

強く撲ならば破らず
弱くは響かざらぬ

生れしうにしかへろみば
幸なくわわれとなかなか
頬に笑みをはうくゆら

さかなさ人のさけすみて
さくとくしくたされとも
衣うつくしくたされとも

語るをさけばわか胸の
心理学で人の心の話を聞いたり、教育学の方法で教育の話を聞くのは共通の場合に付いての話で心にかかってのかれ
考えることである。即ち人は各特性を有って居て居て幾分か異なる
性質を有つて居る。之を性質の特性を

一、身体的要素

ものが三つある。

三十五
三、遺伝的要素

身体的要素

身体の弱い者体の moet 原因の点では身体の強弱 Portuguese

三、遺伝的要素

身体的要素

身体の弱い者体の moet 原因の点では身体の強弱
皮膚覚の（感覚的）典型

一、皮膚覚の（触覚的）典型

二、皮膚覚の（触覚的）典型

三、皮膚覚の（触覚的）典型

四、皮膚覚の（触覚的）典型
三聴覚の典型、耳で聞いたことをよく記憶する。
もど子と人姫

パリオリンは如何なるものであるかという様々な問

に諸して答とさせて其答が形と聲の何れに屬する

四、筋覚的典型、筋肉の運動に訴へたことを

よく記憶して居る。これは技藝に関するものをす

りニキの必要である。或人は筋覚に長して居る人

は彼等は如何に筋肉をはたらかせ居るかを思い

に出さずに居られぬといふて居る。俗にいふ器用の

とよく記憶して居る。又外の読める書を読書

させると或る人は字を見居って默読する、又或る

児は舌、唇を動かして音読する。其筋肉を動かし

て読む方の人は筋覚運動に長して居る人である

以上述へ来た如く子供は何れの感覚機関を尤

である。

三十九
運動的児童、感動的児童

家屋の内音楽がなければ陰気である。家庭には必ず楽器を備え、ねばならぬ。器楽がなければ歌をたとえ立しない。従って子供は益々子供を歌い出しなければならない。学養の高さになる。

子供には運動的、感動的の二種がある。如何なる理由によって絵の如き区別があるかは別問題とし、実際に子供を見に居るとこの二種のあることはよく分る。即ち運動的児童は刺激を受けると直に運動する能力を有するものである。此種に属するものが子供の生活を送る自由な生存にある。又運動的児童は自身で伸ばし、学習問題がある。又不一の感動的児童は自らで伸ばし、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことが出来ると、子供が教育の目的が何かこれを運動に表し、子供が歌い出、楽しむことがえりと云ふことがある。
凡て、教育事業は、その種類の如何なるものたる
も、子と子と八姫

二

然らざるを論せず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざるものな
かを論ぜず、何れも皆必要挙べ、からざのも
三

教育事業は、その種類によって価値を異なるものにあらわるが、前述の如くなるところ、教育の方法に至ってはや、趣きを異なるものあり。思ふに、教育事業そのものを教育の方法としては似て非なるものにいて、二途決して混同すべきものにある、然して教育の方法は被教育者が心身の発達の程度に至ってはや、趣きを異なるものあり。思ふに、教育事業そのものを教育の方法とは似て非なるものにいて、二途決して混同すべきものにある。

四

助教の必要を求めて、幼児の教育を知るべき、間に、問題として幼児の教育のあることを知るべき。幼児の教育とは何か、小学校教育、幼稚園教育、幼年の教育とは何か。小学校教育、幼稚園教育のための教育とは何か。若者、幼児の教育を知るべき、それに伴う方法の価値を生ずるなり。世人が幼年教育は重要なりと云ふは、全くこの要なり、少年教育は重要なりと云ふは、全くこの要なり。彼等の価値の高下を生ずるなり。
附興させざるべからず。小学校教育法を研究するよ
り、時々時間と筋力をその幼年教育法に傾注
せざるべからず。幼年教育法の研究は、決して関
人問題にあらず、所謂教育家の人手間に論ず
べきものにあらずなり。幼年教育法中、やや秩序ある研究の成りは、思
みに幼年保育法なるべし。それ、フローメ
ル去りて兹に五十有余年、その研究何どの進歩
をかなしける。吾人は惨る、幼稚園の値値は亜々
を疑はれ、その廃園の悲哀に遭遇したるもの又三
これ無きにあらずりとを、営これ幼稚園との
ものの罪ならんや。幼稚園保育法の改革を意りし
人の罪なり。我が友東君は我が国に於ける幼年園
の唯一の研究者なり。少くとも日本の幼稚園事業
の為なり。本書は、その名目よりも判ずるも、著者の現職より
考ふるも、全く幼稚園保育法の書たること論無さ
なり。それ、全く幼稚園保育法は独立これを幼稚園
のみ適用すべしとならば、又、なさざるべからざ
の保育法となすべきならなり。。

（四）
用いられ、前一層適切なる家庭の諸物たらしめな

にと、薄か遺遺に塗るなり。著者も亦

に於て、故に著者は学院の教授及世の母

たる人に向つても書く本書の一読を冀ふものな

と考えられたり。著者の希望や甚だよし、然

れども著者はこの希望に添ふ用意ありや否や

を直に非専門家に示させられること歴々と

して読むべからざるものあればなり。

その文体の平易流麗にして読み去る読み来つて何

等の苦躰を感ざるは、よく本書の性質を合せる

ものと云べべく、又、その組織に附ては、まず教

育法の本論に移り、終りにプロセレルの略傳説説

入り、最後に附するに幼稚園の設備を以てした

予は論評の簡潔ならんことを望みか故に、直に本

五

連絡あらしめば、益々妙ならしならんと感じら

るのみ。


三、家庭教育（個人教育）と学校教育（衆人教育）
子と人

この間には連絡なし。然して、幼稚園はその

設けざるべからざるほどの懸隔を生じ居らや、

校教育に接近せしめること、

一層家庭教育に接近せしめること、

校教育として一層家庭教育に接近せしめることが

は不可能のことなりや、家庭教育をして一層學

校教育に接近せしむる方策無にや、凡そ、これら

の問題に答ふところを知らざるくして、漫然連絡の必要

あり、従って幼稚園の設立の必要ありと論ずるは

的を錯したるもと語り得べきか、吾人論

て

一、児童の個性を害す

二、病の伝染悪風の発播の恐れあり、著者は幼稚園の数多とし

止まるべきとせられたるにはあらざるべきけれども、そ
六

次に、保育事項中の一つ、なる話題に就て、一言せん。

予の切に問はん

如くにははらざるか。それ、又予の切に問はん

子と人婦
を除去し得べしと信ず。いかん。
次に、恩物に就て一言せん。予言で始めてフローメン
ルが恩物に関する意義を聞くや、その説の漢唐の
儒者に陰陽五行の説めきたるに驚き、思へらく、
かいる恩物を基礎として作られたりのもの。久しく
その価値を保ちしとせ論言さるも。されど、教育
の創意に成れるものをあらざるや明かなり。され
と、後年作成する所のもの、皆氏と同一の精神
を基として案出したるものなれば、又均しくその
価値と疑ふべきもなり。予の恩物に対して価値
を疑ふしとせは、凡そ左の三條にのる。
一、抽象的なること。従って興味に乏しくこと。
二、小細工に過ぎること。従って筋肉の練習には
或は有功ならんも、満身の勇気を鼓して事業
に當る良習慣を興ふることを得ざること。
三、その多くは機上の手業に属すること。従て手
技の種類の少きに失すること。二と三とは説明
することに及ばず、只第一項のみ少し
角形、五角形、円形等に及び、それより簡単なる
フローレル既にこれを説げり、それと之れ説き易く
表の正円図次に側面図次第にその複雑の度を
加る様仕組みたるものなり。編者は以て単より
繁に進むて父教育上の原則に合せりとなれば。然
るに、今この順序全然不可なりと認みてはは
具鉾より抽象に進むて父教育上の原則に戻るもの
なり。これ趣味無く教育・有害のものなら
れ、子は遊園を利用することの乏しき理由は、
遊園を多く利用すべきこと、幼星の個性を發
せしむべし。この二項は最も時敏に適中するも
のなりと信ず。遊園を利用すべし而説くこと。
子供と人

育学者皆同一なり。されど、それが事実の適用に
斜いと説きその方法に及ばざるは遺憾なりと
いふべし。この難点につきて予別に説あり。今こ
に云ふべきなにあらば、後日稿を改めてこれを
論ぜん。

以上は、一覧その所感を記したりものの、その精細
なる評論に至りては自らその人から。予や門外出
潔、その云ふ所悉く声無に申ざるを恐る。

妄説多賜。

A good example is the best sermon.

さて実例は最良の訓へなり。

幼より下の子供に、自発的運動を抑制すると
精神の活動も亦之に伴って抑制せられるものだ。
子供を訓育して行くには、耳から興へる所の所謂
命令的訓育はなるべく少くして、子供の眼に訴
て訓育するのがよい。
子供の死亡の割合

ある仏国は、学者の説によれば、子供の死亡の割合は、生まれた前の間には、出産する子供の数の四分の一、一歳から六歳までの間には、出産する子供の数の二分の一、六歳から十四歳までの間には百人に付き十人、五、又は十六人、六歳から六歳までの間には百人に付き三人、百人につき二人又は三人に當るといふ事。

割十二ヶ月

石井泰次郎

五月の料理には、古い月次記事に上加茂の競馬、甲冑を着し馬に騎いて供奉せる藤の森の神幸、難波合戦の勇将木村長門守、なら古く坂上田村、今川義元忠、源三位入道願政忠、などとこの月の行事なり、楠正成ぬしのもこの月に行ふべき行事、午前の料理法は、満煮にする、に酢にする、たえ、午後の料理のときは、薬味、甘煮、紅葛煮、大銭煮、紫蘇巻、海苔巻などといろくある。

時米のとき洗いあらばそれにて満煮してよし、さつ

石野泰次郎

五月の料理には、古い月次記事に上加茂の競馬、甲冑を着し馬に騎いて供奉せる藤の森の神幸、難波合戦の勇将木村長門守、なら古く坂上田村、今川義元忠、源三位入道願政忠、などとこの月の行事なり、楠正成ぬしのもこの月に行ふべき行事、午前の料理法は、満煮にする、に酢にする、たえ、午後の料理のときは、薬味、甘煮、紅葛煮、大銭煮、紫蘇巻、海苔巻などといろくある。

時米のとき洗いあらばそれにて満煮してよし、さつ

石野泰次郎

五月の料理には、古い月次記事に上加茂の競馬、甲冑を着し馬に騎いて供奉せる藤の森の神幸、難波合戦の勇将木村長門守、なら古く坂上田村、今川義元忠、源三位入道願政忠、などとこの月の行事なり、楠正成ぬしのもこの月に行ふべき行事、午前の料理法は、満煮にする、に酢にする、たえ、午後の料理のときは、薬味、甘煮、紅葛煮、大銭煮、紫蘇巻、海苔巻などといろくある。

時米のとき洗いあらばそれにて満煮してよし、さつ

石野泰次郎

五月の料理には、古い月次記事に上加茂の競馬、甲冑を着し馬に騎いて供奉せる藤の森の神幸、難波合戦の勇将木村長門守、なら古く坂上田村、今川義元忠、源三位入道願政忠、などとこの月の行事なり、楠正成ぬしのもこの月に行ふべき行事、午前の料理法は、満煮にする、に酢にする、たえ、午後の料理のときは、薬味、甘煮、紅葛煮、大銭煮、紫蘇巻、海苔巻などといろくある。

時米のとき洗いあらばそれにて満煮してよし、さつ
煮魚がちるを、竹の細串にてさしていきみて、

柔らかになりたくれば、湯より取て、鍋に砂糖と

鰹油と水とを、左の割合にして煮篤める。

砂糖二十二分。

醤油三匁。

水五匁。

午蒡十

五切ほど

火はつらぎねほどがよし、ゆるくと煮篤るを

よしとす。火つよければ、煮あがらぬ末へにこげ

つきてあれば、注意すべし。

たき午蒡の

療方

午蒡を、うねにて洗ひて二寸位に切て、皮をむき、

中の中の心の所をくびいだして（つば鉢などにたくり

ぬかり）湯煮たる後に、棒をもって板の上に

て叩きひしきて切形して、山椒醤油にひたして食

すべし。山椒醤油とは、山椒の木の実を洗ひて乾

すがりして、臭きをうらぬを切って、つるものを

酢のよろしきを用ひて、右の湯煮したるを、取つ

て、能々湯を切り、酢に浸しきやで、味のつ

きるを食すべし。

あぶる午蒡の

療方

午蒡を洗ひて皮をむきさり、二つにわりて心得て

し、又は山椒みをもを焼たる上にぬるもよし。これ

はあたらしさ午蒡にかぎるべし。

味噌のへ午蒡の

療方
まへの湯、午前後のこしらへかたにしたると。緑麻み
と、又山椒みをなど十一へあるなり。切方は頭く
して、長くも輪切にむすべし。

午前の及びの。生えき

甘煮午前断の

又の

午前の大さるもの、洗ひて、上皮を庖丁刀にてこ

そかとして、飯のとり湯を水を合せたるにて、

能々湯煮して、箸のわけなく通るはどにして、矢

にあげて、上より清き川水をかけ、水気をとりて

のち、鍋に味りん酒四合と醤油六合の割合にて、

午前をに入れ、つよく火にてこげつつう様に注意

して煮るべし。煮あがりたるを、小口より五六分

に切て、器にもらいて出べし。上に青のりを焼いて

ふくかけて出べし。

○又初より五六分の木口切にして、湯煮して、

煮るももよし

家庭に於ける所感

○ふるい均上へ濃しみを湯煮して、馬尾鰭にて

洗したる、粉をかけて出べんよし。

紫蘇卷午前断の

午前、若さのものを、洗ひて、皮を庖丁刀にてこ

そかして、三寸半に切て、湯煮をして、味淋酒にて

能く煮、醤油少量にし、味ついたるを切にしにし

て中の種を除きて入れ、一煮したるを板の上に取

ばして、午前をきりくと卷いて、一種の酒葉また

ばげ、他のあららへにしてもよし。

みなつきの料理はつぎにしました。
模子と人

家庭における実験したことは笑いを含めたことから始め、家族のことを考えたときの話へと進む。家族との関係を以って事柄を考察し、社会的な視点から見た家族の役割について述べる。家族は社会的な単位として存在し、家族の役割は社会の運営において重要な役割を果たす。
はい、この文は日本語です。ただし、翻訳することはできませんが、自然な形式で書くことができます。もし必要な内容が含まれている場合は、それを抽出することができます。
もちろん、自利的であるからです。一日も早く学びを深め、その基礎を築いて、社会に貢献できるようになることが必要です。しかし、そのために必要なのは、まず自分自身の成長と学びの積み重ねです。自分自身を信じて、努力を重ねて、成功に向かって進んでいくことが大事です。

これから、様々な可能性が開かれる世界に立って、自分自身の価値を発揮し、社会の進歩に貢献できるようになることを願っています。
子に父のことをしらせたため毎朝夕父のしっかり

子を見せていろ。本気でしらせた。念入りにしらせ

見せている。 السنةは決して忘れておらぬ。

愛と敬をつくるのは、大事なことである。 五年

父は五年で始めてきた。それまで、立ち上がっ

た。しかし、この子は、とうぜん父さんがわか

う。たとえ小さくても見えてきたのである。

敬としなくと、子の大きくなるのを見て己の

心をなくさぬと。乳をしらせた。父のしゃしん

をしらせた。
彼は大抵、之をその伴人所の老僕に托し、己は先
て自分から楽みる。書籍の包みを蔽せる樓
上に至り、其の包封を探し、後、身とルソ
ブとランサムの間の路傍に潛め、老僕の市場
に帰り来る迄、書見に耽るを常せり。里

是に於て、其の母の持牧場に送り、羊及び牧畜を
入れて、然れども、ニュートンは、彼に其の書

冊を手にして、樹下に踞るにあらざれば、即ち

ナイフを以て模様を刻するに、園間の側、清流の

涯に在る、榴掛水車の回転に凝視せり。之

の始めて科学的実験をなせるは、實に千六百

五十八年、大暴風の時ににして、恰も、彼のクロ

ムウェル残したる時にして、ニュートン、自池

十六歳にしての折なり。
河野のし、在校生友某氏に宛て送られたもの

一読、彼地の状況を目前に浮かべてみると、

「奥味深ければ、乞ひ得て、抄写する事」とし

それ御覧の通り、丁度私共の家は四畳に当る

下は大で窓を明けることが出来ず、奥間、それ故階

はおうと広く十間余もありまして、人の

通路はやはり縦抜数箇にあって居ます。それに電

燈はいつもも聞かせておらず、當地にて驚

くべき事は、道路の多いのに、市區の界に立派

に出来て居て、町家は大抵同じ形の家で、一町は

皆一廁で出来て居ますのです。なぜかよく出来

て居るかと、さしあげますれば、それ等の家は、大抵、

皆皇族の方々の貸家であるということです。私共

からです、私共の女には、散步などは、とても思

かんです。
ひまいる日の事です。

夕方になると、馬の群馬、牛の群馬が、一人の御門に

者をもって川に導かれるのです。時によると、馬數

匹がひとりで町を散歩して居るのです。そこへ犬

が出て来てはむれて居るので、はんとうに

面白く思います。實にこれ等の畜生の事は柔順で

是に驚きました。高は人の順位しかありませね。

しかし、犬は随分長いから、始は何とも感じさせ

られました。ハダカンボは何する程、山あるの

です、見る人も通る人も皆ハダカンボ笑い、代

りも河に参りまして、沐みて垢を洗うとして行く

のですが、夕方なはは、やはりハダカンボまで

見ていてもたまらぬようですね。

さて、此身体を洗ひ、牛馬を洗う川水を、一方

から、すんく酢をみ入れて使つて居るのです。か

てある川水、此中に船を浮べて住んで居る人も漂

てある。不潔のものは、すんく川の中には流れ

山ある。不潔のものは、すんく此川の中には流

てある川水、此中に船を浮べて住んで居る人も漂

てある。それをかまはす用ぶる水とするとは

本気の業では出来ぬ事である。飲用水は少しにな

いから、私共はかへに買つたのです（蒸溜水

水）
The blind shall be happy in the city
幼児が歌謡の意味を理解したるこに直に動作に表示する事

一、雲雀は歌い

は自然の性に出るものにして幼児の極めて愉快とするところ

雲雀は歌い蝶々は踊る春の野山に遊ぶば嬉しく

にはよめ菜とこにはつくたんぽんみられ

右の手を人さし指にてそこ

花をは採りて

少しく遠方に指す

三度ずさすあり又左より右に

次三度ずさすあり又左より右に

花をは採りて
草をは摘みて

1 粗末なすなと母上の

1 粗末なすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の

1 粗末にすなと母上の
休日の日には花
けけるもあまりこよい動作
前の動作は前かねの動作を
到るもあまり花見のところに
至りては全く動作せず
指間を開き出来得るだけ早く
内方へ力を導き小器の
両手を交互に上下して鼠の
食べを表す

学校すみて帰るを
布莱に起

（右）一つは男見最も喜びてな
前の動作を極めて緩がになす
右手を左方に向け鼠の
両手のさきを上に向けてつつき
勧かす一破る異似をなす

この所動作なし
子どもと人

二

左の便條は、大阪市十二階ゲネル氏よりも送附された

小児に関する取調

一、小児に関する取調

一、小児に関する取調

二、小児に関する取調

三、小児に関する取調

四、小児に関する取調

三、小児に関する取調

四、小児に関する取調

五、小児に関する取調
模子と人聲

事日なりしのが出血の甚だしからし為、遂に果敢に
事日なりしのが出血の甚だしからし為、遂に果敢に

事日なりしのが出血の甚だしからし為、遂に果敢に

事日なりしのが出血の甚だしからし為、遂に果敢に
しを悔いてなや、程なくも其競合の内にて、腦骨を碎きて少女の跡を追ひたりとか

フレーザ爾会俳句端書集

一

一

八月發行本誌文苑欄

賞品

天地人三座には美景を呈す

投稿

本誌購読者は何人にしても應戦すること

撰者

當分本會の撰とす、

○雑吟十句（結幼稚園）

無一庵奇雫
子 子・入 嫁

はあらざりしと覺ってはあり。

音楽の音楽。東京府内諸学校生徒の合唱とあり。

何れも面白く、就中、従来歌、廣瀬中佐、海軍

の三曲、殊に感動を興へたるが如し。

音楽学校春期演奏会

本月五日開くべき管、プログラムは左の如し。

一般合奏

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽

三、ピアノ独奏

工部本舗

助教授

神楽
夏季女子講習会要項

三
講習料
一科二週五両音楽は二週八十両講習生は三週科三円五十両
二科二週五十両音楽兼習は二週四科三円五十両

四
家庭衛生（凡そ二十時間）

家庭衛生の一般に涉りて講習し且傷病手當のことを説き特に児童に関じて多く注意を加べし

証明書

出席の度数を案して授與す

入会申込

入会せんとする者は氏名宿所族籍職業を記したる書面を以て係

東京府教育会

吉田定治君

三好常三郎君

東京高等師範学校教授

鈴木次郎君

明治卅七年五月

東京市神田橋外

電話本局七八八
女子手芸学科増加

○花結
○素麺
○製絹
○絹

女子總理

 Came to无可

八月薪金$500

七月一日実用西洋料理合宿

次の帰還時間

大日本割烹節料理教室講座

明治三十七年六月

鈴木町十一番地

大日本割烹節
